観天望気

成長から成熟への道

「人生百年時代」というのは、単なるジャーナリズムの囃し文句ではない。

実際に私自身も八十八歳の現在、以前と変わらぬ七本の連載を抱えながら執筆生活に追われる日々を送っている。たぶん九十歳を過ぎても、仕事は続けているだろうと思う。

先日、ある文学賞の選考会で、はじめてオンライン会議による選考を体験した。他の選考委員のメンバーと、映像を通じて候補作品について討論したのだが、意外にスムーズに選考が進んだことに驚いたものである。

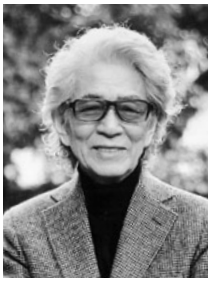
私たちはいま、文明の成長期に生きているのではない。登山でいうなら下山の過程にさしかかっているのだ。下山、というと、なんとなく活気のない時期のように思う人もいるが、それは間違いだろう。

経済の発展と文明の成熟はシンクロしない。そこにはタイムラグがある。成長期を終えたあとに文明の成熟がはじまるのだ。それをハーベストタイムと私は考えてきた。

必死で頂上をめざして登攀（とうはん）している過程には思索する余裕はない。頂上を後に下山する時間こそ豊穣な時間である。来し方行く末を思い、平野や海を遠望しながら、一歩一歩ゆっくりと下山していく。足もとの高山植物を目にしては、こんな高山にも野の花は咲くのだと驚き、雷鳥の姿に心を和ませる。次はどの山に登ろうかと思うことも楽しい。登山は充実した下山によって完成するのだ。野球も駅伝も終盤が醍醐味なのである。

新型コロナのパンデミックは、文明の大きな分岐点ではないだろうか。地球環境から社会格差の問題まで、豊かなる下山の時代がいま始まろうとしている予感がある。

石炭の時代も終わり、石油の時代も終わろうとしている。成長から成熟へ。下山を黄金期とみる視点を確認することが重要なのだ。



五木 寛之
作家

いつき ひろゆき
1932年福岡県生まれ。早稲田大学文学部ロシア文学科中退。代表作に『風の王国』（新潮社）、『親鸞』（講談社）など。98年に刊行した『大河の一滴』（幻冬舎）が昨年話題となった。小説以外にも幅広い批評活動を続けている。